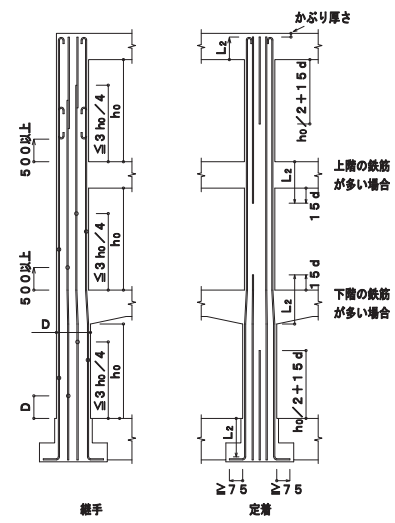


構造配筋基準(2)

(仕様書: 令和7年版)
(作成: R7.8)

12 柱主筋の継手、定着及び余長



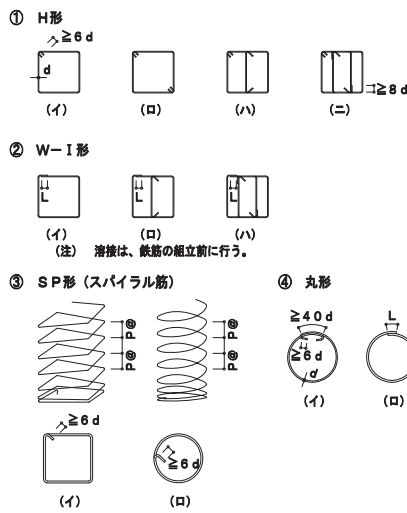
- 柱の四隅にある主筋で、重ね継手の場合及び最上層の柱頭にある場合には、フックを付ける。
- 隣り合う継手の位置は、6-2表による。

12-1図 柱主筋の継手、定着及び余長

- 【その他記載すべき事項】
- 鉄筋の種類及び呼び径 (mm)
 - 継手の方法
 - かぶり厚さ

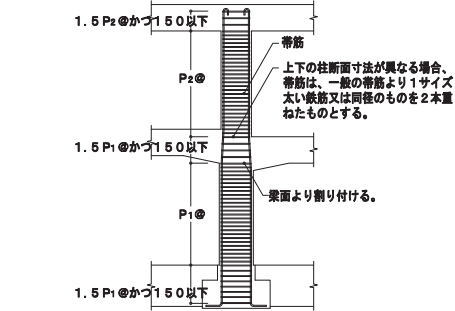
- 【設計注意事項】
- 柱頭定着長さ L_2 が確保できない場合は、構造計算等により必要長さの確認を行うものとする。
 - 柱頭主筋について、梁上端主筋との取合いを考慮し、適切なかぶり厚さを確保する。

13 帯筋組立の形及び割付け



- H形を標準とする。
- フック及び継手の位置は、交互とする。
- 溶接する場合の溶接長さ L_1 は、両面フラシ溶接の場合は $5d$ 以上、片面フラシ溶接の場合は $10d$ 以上とする。
- SP形において、柱頭及び柱筋の増部は、1.5巻以上の巻巻きを行う。
- H形の135°曲げのフックが困難な場合は、W-I形とする。

13-1図 帯筋組立の形

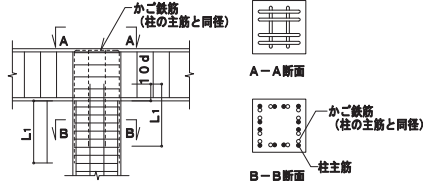


- 柱に取り付けに帯筋がある場合、帯筋の間隔を $1.5P_1$ 又は $1.5P_2$ とする範囲は、その柱に取り付くすべての梁を考慮して適用する。
なお、 P_1 、 P_2 は、特記された帯筋の間隔を示す。

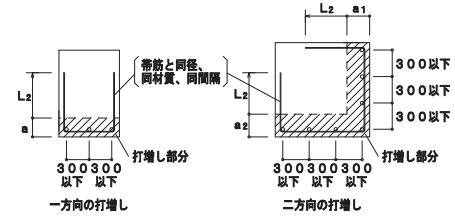
13-2図 帯筋の割付け

- 【その他記載すべき事項】
- 鉄筋の種類及び呼び径 (mm)
 - 帯筋組立の形
 - 帯筋の間隔 (mm)

- ・柱頭部の主筋の定着長さ (L_2) の不足に対する処置方法
- 柱頭主筋全数にフックを設け、必要定着長さを確保する方法。
 - 鉄筋かごを梁筋の上から柱頭にかぶせ、鉄筋かごと柱筋を重ね継手により一体とする方法。
(社団法人 日本建築学会 「鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説2010」による。)



14 柱の打増し補強



- 柱の打増し幅 (a 、 a_1 、 a_2) が 70mm 以上の場合の補強を示す。
- 帯筋と同一方向の補強筋は、帯筋と同径、同材質、同間隔とし定着長さは L_2 とする。
- 軸方向の補強筋間隔は 300mm 以下とする。

14-1図 柱の打増し補強

- 【その他記載すべき事項】
- 鉄筋の種類及び呼び径 (mm)
 - 軸方向の補強筋本数
 - 打増し幅

15 大梁主筋の継手、定着及び余長

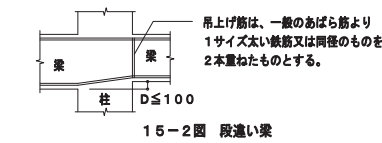
(a) 大梁主筋の継手及び定着の一般事項

- 大梁主筋は、原則として、柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、(2)により柱内に定着することができる。
- ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、15-1図による。

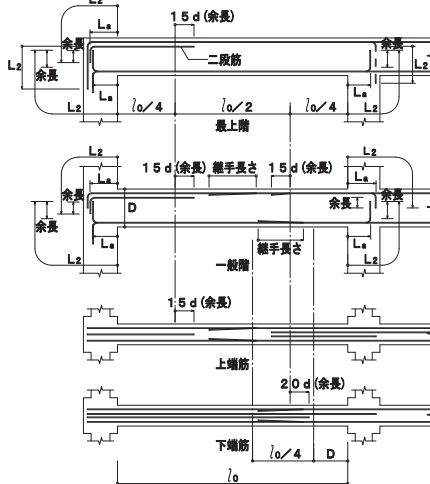
15-1図 大梁主筋の梁内定着

- 大梁主筋を柱内に折り曲げて定着する場合は次による。なお、定着の方法は、6(e)(2)による。
上端筋: 曲げ降ろす。
下端筋: 原則として曲げ上げる。

(3) 段違い梁は、15-2図による。



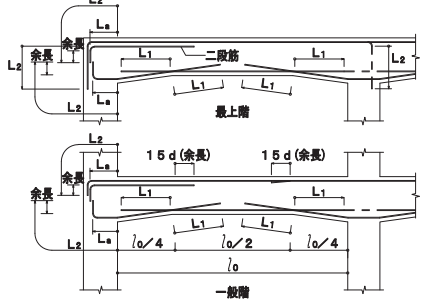
(b) ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長



- 継手中心位置は次による。
上端筋: 中央 $lo/2$ 以内
下端筋: 柱より梁せい (D) 以上とし、 $lo/4$ を加えた範囲以内
- 4(b)(3) で定めた鉄筋には、フックを付ける。
- 印は、継手及び余長を示す。
- 破線は、柱内定着の場合を示す。
- L_a の数値は、柱せいの $3/4$ 倍以上とする。

15-3図 大梁の重ね継手、定着及び余長

(c) ハンチのある場合の重ね継手、定着及び余長



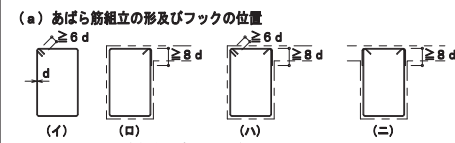
- 4(b)(3) で定めた鉄筋には、フックを付ける。
- 印は、継手及び余長を示す。
- 梁内定着の端部下端筋が接近するときは、---のように引き通すことができる。
- 破線は、柱内定着の場合を示す。
- L_a の数値は、柱せいの $3/4$ 倍以上とする。

15-4図 ハンチのある大梁の定着及び余長

- 【その他記載すべき事項】
- 鉄筋の種類及び呼び径 (mm)
 - ハンチ部分の傾斜

- 【設計注意事項】
- 梁下端筋を、やむを得ず下層の柱に曲げ下げる場合は、下柱に十分な量の帯筋を配するなど注意が必要である。

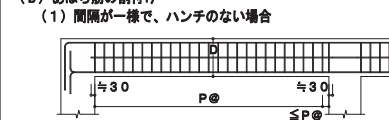
16 あばら筋の組立の形及び割付け等



- (イ) 形を標準とする。ただし、L形梁の場合は、(ロ) 又は (ハ)、T形梁の場合は、(ロ) ~ (ニ) とすることができる。
- フックの位置は、(イ) の場合は交互とし、(ロ) の場合は、L形ではスラブの付く側、T形では交互とする。なお、(ハ) の場合は床版の付く側を 90° 折曲げとする。

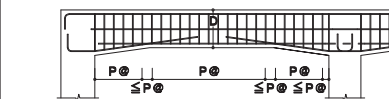
16-1図 あばら筋組立の形

(b) あばら筋の割付け



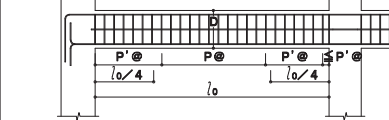
16-2図 あばら筋の割付け (その1)

(2) 間隔が一様で、ハンチがある場合



16-3図 あばら筋の割付け (その2)

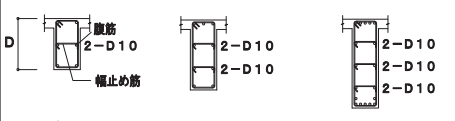
(3) 梁の端部で間隔の異なる場合



- あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
- 図中の P 、 P' は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

16-4図 あばら筋の割付け (その3)

(c) 腹筋及び幅止め筋



- 腹筋に継手を設ける場合の継手長さは、 150mm 程度とする。
- 幅止め筋及び受け用幅止め筋は、 $D10-1,000$ 程度とする。

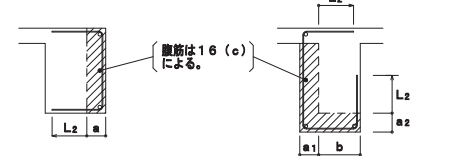
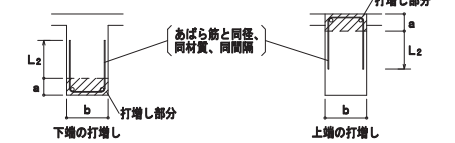
16-5図 腹筋及び幅止め筋

- 【その他記載すべき事項】
- 鉄筋の種類及び呼び径 (mm)
 - あばら筋組立の形

【設計注意事項】

- 腹筋を計算上考慮している場合の継手長さ及び定着長さは、別途定めること。

17 梁の打増し補強



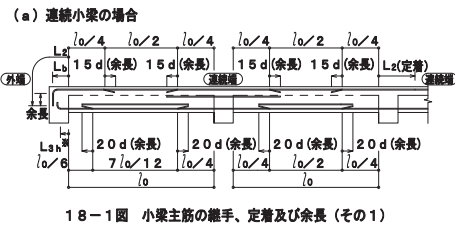
- 梁の打増し幅 (a 、 a_1 、 a_2) が 70mm 以上の場合の補強を示す。
- あばら筋と同一方向の補強筋は、あばら筋と同径、同材質、同間隔とし、定着長さは L_2 とする。

17-1図 梁の打増し補強

【その他記載すべき事項】

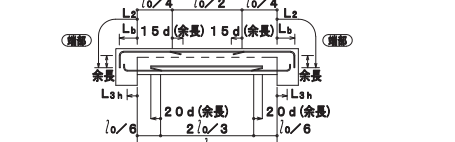
- 鉄筋の種類及び呼び径 (mm)
- 軸方向の補強筋本数
- 打増し幅

18 小梁主筋の継手、定着及び余長



18-1図 小梁主筋の継手、定着及び余長 (その1)

(b) 単小梁の場合



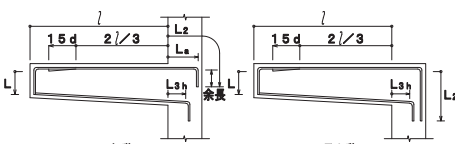
18-2図 小梁主筋の継手、定着及び余長 (その2)

- 印は、余長位置を示す。
- 梁せいが小さく垂直で余長がとれない場合、斜めにしてもよい。
- 図示のない事項は、10及び15に準ずる。

- 【その他記載すべき事項】
- 鉄筋の種類及び呼び径 (mm)

19 片持梁主筋の継手、定着及び余長

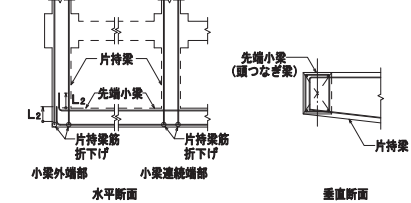
(a) 先端に小梁のない場合



19-1図 片持梁主筋の定着及び余長

- 印は、余長位置を示す。
- 先端の折曲げの長さ L_3 は、梁せいからかぶり厚さを除いた長さとする。
- 図示のない事項は、15による。
- L_a の数値は、柱せいの $3/4$ 倍以上とする。

(b) 先端に小梁がある場合



- 図示のない場合は、(a) による。
- 先端小梁終端部の主筋は、片持梁内に水平定着する。
- 先端小梁の連続端は、片持梁の先端を貫通する通し筋としてよい。

19-2図 片持梁主筋の定着

20 壁の配筋

(a) 壁の配筋は、20-1表による。

20-1表 壁の配筋		
種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)
W12	D10-200@シングル	120
W15A	D10-150@シングル	150
W15B	D10-100@シングル	150
W18A	D10-200@ダブル	180
W18B	D10-150@ダブル	180
W20A	D10-200@ダブル	200
W20B	D10-150@ダブル	200

(注) 壁筋の配筋順序は、規定しない。

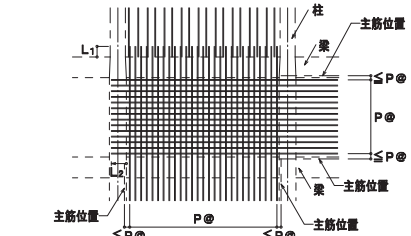
(b) 片持スラブ形階段を受ける壁の配筋は20-2表による。

20-2表 片持スラブ形階段を受ける壁の配筋			
種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)	階段の配筋種別 (34-1表)
KW1	縦筋 D13-200@ダブル	180	KA1
	横筋 D10-200@ダブル		KA3
KW2	縦筋 D13-150@ダブル	200	KA2
	横筋 D10-200@ダブル		KA4

(注) 縦筋は、横筋の外側に配筋する。

- 【その他記載すべき事項】
- 配筋種別
 - 壁の厚さ
 - 鉄筋の種類

21 壁の継手及び定着



- 図中の P は、特記された壁筋の間隔を示す。
- 壁筋の重ね継手は L_1 、定着長さは L_2 とする。
- 幅止め筋は、縦横とも $D10-1,000$ 程度とする。

21-1図 壁の配筋

- 【その他記載すべき事項】
- 鉄筋の種類及び呼び径 (mm)
 - 壁筋の間隔

- 【設計注意事項】
- 柱及び梁内に、壁筋の継手を設けてはいけない。

株式会社 福本構造設計
一級建築士事務所 北海道知事登録第(石)1066号
一級建築士登録 第248402号 新倉 隆
構造設計一級建築士 第 6432号

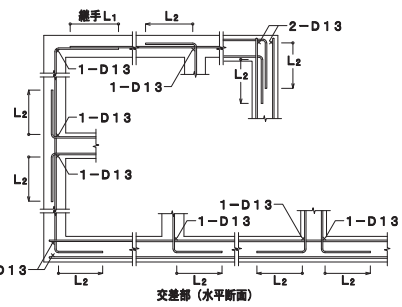
一級建築士登録 第275078号 中澤 浩之

工事名	北海道建設推進センター 取水施設新設工事		
図面名	ポンプ棟 構造配筋基準(2)		
作成年月日	令和7年 月 日		
縮尺	(A1) (A3)	図面番号	S-03
会社名	株式会社 アルファ水工コンサルタンツ		
事業者名	北海道		

構造配筋基準(3)

(仕様書: 令和7年版)
(作成: R7.8)

2.2 壁の交差部及び端部の配筋



【その他記載すべき事項】
鉄筋の種類及び呼び径 (mm)

2.3 壁の開口部補強

(a) 耐震壁を除く壁開口部の補強筋は、A形は2.3-1表、B形は2.3-2表とする。

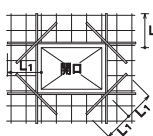
2.3-1表 壁開口部補強筋 (A形)

壁の種類	補強筋	
	縦筋	斜め
W12、W15	1-D13	1-D13
W18、W20	2-D13	2-D13

2.3-2表 壁開口部補強筋 (B形)

壁の種類	補強筋	
	縦筋	斜め
W12、W15	2-D13	1-D13
W18、W20	4-D13	2-D13

(b) 壁開口部補強筋の定着長さは2.3-1図による。

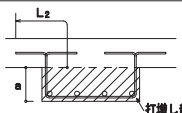


2.3-1図 壁開口部補強筋の定着長さ

(c) 開口部は柱及び梁に接する部分又は鉄筋を緩やかに曲げることにより開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。

【設計注意事項】
コンセントボックス等を壁に埋め込む場合の補強は、別途定めること。

2.4 壁の打増し補強



2.4-1図 壁の打増し補強配筋

【その他記載すべき事項】
(1) 鉄筋の種類及び呼び径 (mm)
(2) 縦筋及び横筋の間隔
(3) 打増し幅

2.5 パラペット



2.5-1図 パラペットの配筋

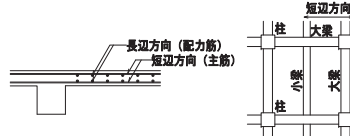
【その他記載すべき事項】
(1) 鉄筋の種類及び呼び径 (mm)
(2) 縦筋及び横筋の間隔
(3) コンクリートの厚さ (mm)

2.6 スラブの配筋

2.6-1表 スラブの配筋

配筋種別	短辺方向 (主筋)		長辺方向 (配力筋)	
	全長	全長	全長	全長
S1	D13-100@	D13-100@	S8	D10、D13-150@
S2	同上	D13-150@	S9	同上
S3	同上	D10、D13-150@	S10	D10、D13-200@
S4	D13-150@	D13-150@	S11	同上
S5	同上	D10、D13-150@	S12	同上
S6	同上	D10-150@	S13	D10-200@
S7	D10、D13-150@	D10、D13-150@	S14	同上

(注) 上端筋、下端筋とも同一配筋とする。



1. 鉄筋の割付けは、中央から行い、端部は定められた間隔以下とする。
2. 鉄筋の重ね継手長さは、 L_1 とする。

2.6-1図 スラブの配筋

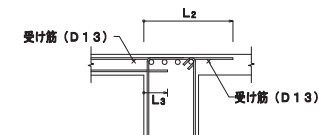
【その他記載すべき事項】

(1) 配筋種別
(2) スラブ厚さ (mm)
(3) 鉄筋の種類

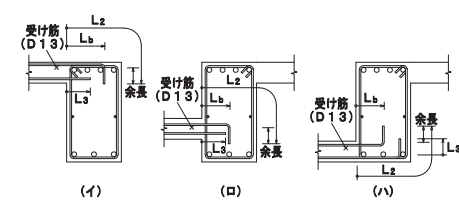
【設計注意事項】

(1) 土間スラブ下の砂利地床厚さ及び捨コンクリート厚さは、別途定めること。
(2) 土間コンクリート補強筋の配筋及びコンクリート厚さは、別途定めること。

2.7 スラブ筋の定着及び受け筋



2.7-1図 スラブ筋の定着長さ及び受け筋 (その1)



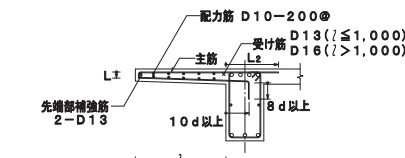
2.7-2図 スラブ筋の定着長さ及び受け筋 (その2)

【その他記載すべき事項】
鉄筋の種類及び呼び径 (mm)

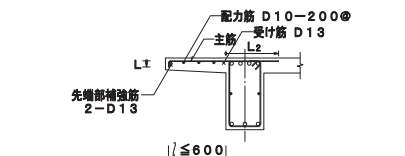
2.8 片持スラブの配筋

2.8-1表 片持スラブの配筋

配筋種別	主筋		配筋種別	主筋	
	上	下		上	下
CS1	D13-100@	D13-200@	CS5	D10-200@	D10-400@
CS2	D13-150@	D13-300@	CS6	D10、D13-200@	
CS3	D10、D13-150@	D10、D13-300@	CS7	D10-200@	
CS4	D10、D13-200@	D10-200@			



2.8-1図 片持スラブの配筋 (CS1からCS5)



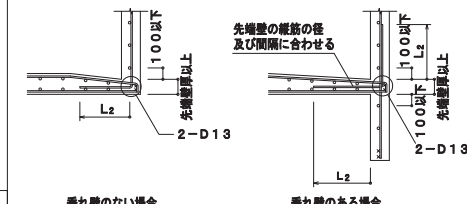
2.8-2図 片持スラブの配筋 (CS6及びCS7)

1. 先端の折り曲げ長さ l_1 は、スラブ厚さよりかぶり厚さを除いた長さとする。
2. スラブに段差のない場合は、主筋を引き通してスラブに定着してもよい。

【その他記載すべき事項】

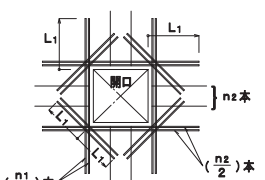
(1) 配筋種別
(2) スラブ厚さ (mm)
(3) 鉄筋の種類及び呼び径 (mm)

2.9 片持スラブの先端に壁が付く場合の配筋



2.9-1図 先端に壁が付く場合の配筋

3.0 スラブの開口部



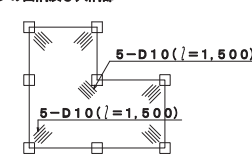
1. スラブ開口部によって切られる鉄筋と同量の鉄筋で周囲を補強し、隅角部に斜め方向に2-D13 ($l_1=2L_1$) シングルを上下筋の内側に配筋する。
2. スラブ開口部の最大径が両方向の鉄筋間隔以下で、鉄筋を緩やかに曲げることにより、開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。

3.0-1図 スラブ開口部の補強配筋

【設計注意事項】
スラブ開口部の最大径が700mm以下の場合に限る。

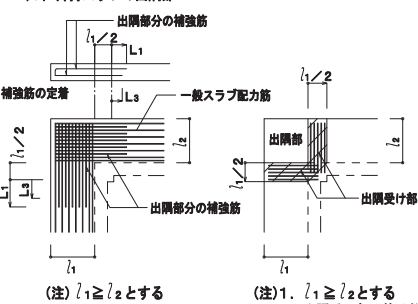
3.1 出隅部及び入隅部の補強

(a) 層根スラブの出隅及び入隅部



3.1-1図 出隅及び入隅部の補強配筋

(b) 片持スラブの出隅部



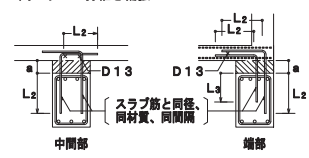
3.1-2図 片持スラブ出隅部の補強配筋

【その他記載すべき事項】

(1) 配筋種別
(2) スラブ厚さ (mm)
(3) 鉄筋の種類及び呼び径 (mm)
(4) 鉄筋の間隔 (mm) 又は本数

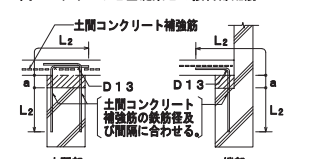
3.2 スラブの打継ぎ補強等

(a) 土間スラブの打継ぎ補強



3.2-1図 打継ぎ補強配筋

(b) 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋

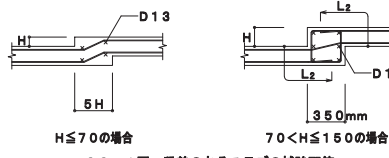


3.2-2図 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋

【設計注意事項】

(1) 土間コンクリートとは、土に接するスラブのうち、床荷重を直接支持地盤へ伝達できるものをいひ、それ以外は土間スラブとして、梁及び柱を介して基礎へ荷重を伝達するものとする。
(2) aが300mm以下の場合に限る。

3.3 段差のあるスラブの補強



3.3-1図 段差のあるスラブの補強配筋

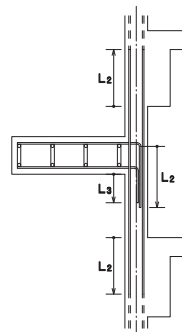
【設計注意事項】

150mm以下の段差のあるスラブの場合に限る。

3.4 片持スラブ形階段の配筋

3.4-1表 片持スラブ形階段の配筋

配筋種別	KA1		KA2	
	上	下	上	下
配筋図	D13 D13 D10-300@	D13 D13 D10-300@	2-D13 D13 D10-300@	2-D13 D13 D10-300@
配筋種別	KA3		KA4	
	上	下	上	下
配筋図	D10-300@ D13	D10-300@ D13	D10-300@ D13	D10-300@ D13



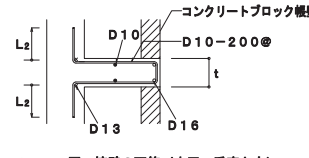
3.4-1図 片持スラブ形階段配筋の定着

【その他記載すべき事項】

(1) 配筋種別
(2) スラブ厚さ (mm)
(3) 鉄筋の種類

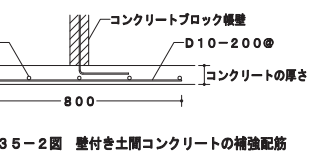
3.5 コンクリートブロック積壁との取合い

(a) 控壁の配筋



3.5-1図 控壁の配筋 (水平、垂直とも)

(b) 積壁が土間コンクリート上に設置される場合の補強



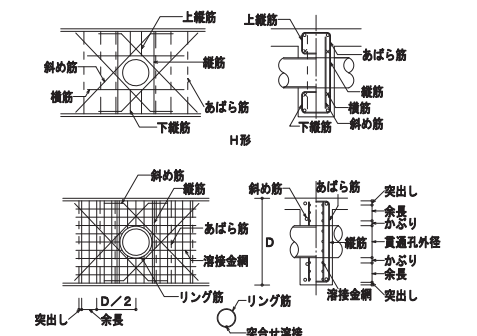
3.5-2図 壁付き土間コンクリートの補強配筋

【その他記載すべき事項】

鉄筋の種類及び呼び径 (mm)

3.6 梁貫通孔の配筋

(1) 梁貫通孔補強筋の名称等は、3.6-1図による。
(2) 孔の径は、梁せい1/3以下とする。
(3) 孔の上下方向の位置は梁せい中心付近とし、梁中央部においては梁下端よりD/3 (Dは梁せい) の範囲には設けてはならない。ただし、耐圧スラブ付きの基礎梁の梁中央部においては、梁上端よりD/3の範囲に孔を設けてはならない。
(4) 孔は、柱面から、原則として、1.5D以上離す。
(5) 孔が並列する場合の中心間隔は、孔の径の平均値の3倍以上とする。
(6) 縦筋及び上下縦筋は、あばら筋の形に配筋する。
(7) 補強筋は、主筋の内側とする。また、鉄筋の定着長さは、3.6-2図による。
(8) 溶接金網の余長は1倍子以上とし、突出しは10mm以上とする。
(9) 溶接金網の貫通孔部分には、鉄筋1-13φのリング筋を取り付ける。なお、リング筋は、溶接金網に4箇所以上溶接する。
(10) 溶接金網の割付け始点は、横筋ではあばら筋の下側とし、縦筋では貫通孔の中心とする。



3.6-1図 梁貫通孔補強筋の名称等

3.6-2図 補強筋の定着長さ

3.7 梁貫通孔の補強形式

3.7-1表 H形配筋

配筋種別	斜め筋	縦筋	横筋	上下縦筋	配筋図
H1	なし				
H2	2-2-D13				
H3	4-2-D13				
H4	4-2-D16				
H5	4-2-D16				
H6	4-2-D19	4-2-D13	2-2-D13	3-2-D13	
H7	4-2-D22				

(注) — は、一般部分のあばら筋を示す。

3.7-2表 M形配筋

配筋種別	縦筋	溶接金網	配筋図
M1	2-2-D13		
M2	4-2-D13		
M3	4-2-D13		
M4	6-2-D13	2-6φ-100@	

(注) — は、一般部分のあばら筋を示す。

3.7-3表 MH形配筋

配筋種別	斜め筋	縦筋	溶接金網	配筋図
MH1	2-2-D13	なし		
MH2	2-2-D13			
MH3	2-2-D13			
MH4	4-2-D13	2-2-D13	2-6φ-100@	
MH5	4-2-D16			
MH6	4-2-D16			
MH7	4-2-D19	4-2-D13	2-6φ-100@	

(注) — は、一般部分のあばら筋を示す。

【その他記載すべき事項】

(1) 配筋種別

(2) 鉄筋の種類

(a) 既製梁貫通孔補強材
スリーブ補強は既製品でも可とする。但し、日本建築センター評定品とする。適用条件はすべて評定内容による。
(b) 配筋種別選定表
社団法人 公共建築協会
「建築構造設計基準及び解説 平成9年版」による。

株式会社 福本構造設計
一級建築士事務所 北海道知事登録第(石)1066号
一級建築士登録 第248402号 新倉 隆
構造設計一級建築士 第 6432号

一級建築士登録 第275078号 中澤 浩之

工事名	北海道建設推進伊達センター 取水施設新設工事
図面名	ポンプ棟 構造配筋基準(3)
作成年月日	令和7年 月 日
縮尺	— (A1) — (A3)
図面番号	S-04
会社名	株式会社 アルファ水工コンサルタンツ
事業者名	北海道